

要旨

中国古代の文人や士大夫を中心とする文人画は、国内外で非常に高く評価されている。彼らは高い文化的教養と安定した収入のため、その芸術創作は商業的ではなく、個人の修養を表現する行為とされた。筆者は文人画の思想文化に影響を受ける一方で、日本でも中国でも西洋的美術教育を受けており、そのために芸術創作の目的においてある種の葛藤を感じてきた。

文人墨客が山水を描いたり鑑賞したりする目的は、この世の煩悩から離れ、静寂の境地に入り、精神的な満足を得ることにある。

つまり山水画とは山水の形を借りて、老荘の「道」を表すものなのである。

しかし、現在、自然環境も私たちの思考パターンも、古人が見ていた風景とその心象とはほど遠いものになっている。このことから本論文では、この時代に生きる私が見る風景やその心象とは具体的にどのようなものなのかを考察する。そのために、筆者は日本画で学んだ技法を活かして「山水」を創作することによって、その過程を分析し、山水の本質であり、筆者の制作の背景となっている老荘思想を今一度再確認しながら論考をすすめる。

本論の目的は「山水」の定義を行うことではなく、より広い視野を持って、「山水画」の可能性を探ることにある。

本論文は三章で構成される。

第1章「路上の徘徊」では、主に自身の作品の理論背景、創作動機、モチーフを三つの節で説明する。第1節では、老荘思想を通じて、老荘思想が中国の美術創作、特に山水画の意図、色彩、構図などに与えた影響を述べる。そしてそこから、自分が受けた影響とそれを作品でどのように表しているかを説明する。第2節では、中国古代の文人墨客による夜をテーマにした作品を引用しながら、その作者の心理状態や行動を分析し、それと自身の創作動機の関連性を考察する。第3節「夜の路上徘徊」では、第2節を踏まえ、なぜ自分は他のところではなく、路上を徘徊するのかを述べる。

第2章「夜の町「山水」」では、第1章で受けた思想の影響と創作動機を基に、これまでに制作した作品を例に挙げ、内面的な感覚が具体的な絵画作品にどのように反映されたかを説明する。第1節「コンクリートと人工物」では、人と自然との関わりに関する私の考えを基に、これまでの作品に如何に大量に人工物の形が切り取られ、描かれてきたかを説明する。第2節「現代の陰陽」では、まず筆者の作品と同時に陰陽の考え方を例に挙げ、自身の陰陽への理解を述べ、さらにはその理解が自作品にどのように表現されたかを解説する。第3節「回遊する路上の「山水」」では、筆者は、山水画のテーマを街並みに置き換えているが、その理解するところの「山水」とは何か、そしてどのように「山水」を表現するのかについて述べる。

第3章「コンクリートで築き上げた「山水」(仮)」では、第1章と第2章を踏まえ、提出作品について解説する。